

哲 学

教 授 田 辺 正 英

1. 研究概要

- 1) 人間における実存の問題を中心として、生の不安や安らぎが絶対や無との関係において如何に変化し、かつ弁証法的に止揚されてゆくかを、実存哲学の問題として考察する。とくにM.ハイデッガーやK.ヤスパーズの人間の把握、絶対との関係を考察する。M.ブーバーの出会い（Begegnung）の問題から出発してハイデッガーの無（Nichts）の孤立的立場を批判検討し、ブーバーの出会いが人間存在における人格や交わりを含むものであることを見ると同時に、ヤスパーズの交わり（Kommunikation）の概念を批判しながら、ブーバーの出会いの概念を実存的なものとして確認した。
- 2) 日本における無常観と罪悪観の関わりの問題を親鸞や蓮如を中心として考察する。親鸞においては仏教的な信心を罪悪観を中心として展開しているが、蓮如においては、仏教的な無常を中心として、信心への契機とする点がとくにめだっている。その点をめぐって哲学者の三木清の『親鸞』や唐木順三の『無常』の中の罪悪観の把握を批判検討しつつ、蓮如の無常観が決して親鸞の罪悪観とかけはなれたものでなく、その表裏一体の関係にあることを証明しようとした。
- 3) キリスト教における神学の組織者、使徒パウロと浄土真宗の教学の大成者、布教の第一人者、蓮如とが、それぞれパウロに対するイエスから、蓮如に対する親鸞からの継承をめぐる問題として論議されている。「イエスカパウロか」「親鸞か蓮如か」が、神学や真宗学のみならず、宗教哲学の問題として提起されている。著名なA.シュヴァイツァー博士や田辺元博士も各々『使徒パウロの神秘主義』や『キリスト教の弁証』で言及している。シュヴァイツァーは、キリストとしてのイエスと使徒パウロの教説との間に背馳するものがないことを弁証し、「イエスカパウロへ」へ矛盾なく継承されていることを力説するが、田辺博士は、W.ウレーテの『パウロ』の説を承認し、キリスト教思想においては「イエスカパウロか」の問題が存在することを認める。そしてパウロの教説を超えてイエスに還ることの必要を説くのであるが、仏教的立場から「親鸞か蓮如か」の問題提起は、多くマルクス主義的立場から親鸞を捉えた人々によって論ぜられており、親鸞に還ることが真の浄

土真宗の教説として把握される。（野間宏，林田茂雄，山折哲雄，服部之総，吉本隆明等の諸氏）

ここではとくに思想的に親鸞と蓮如の教説との関心はとくに人間観，信心についての把握の面で相違のないこと，親鸞は仏から衆生への信心の様相を中心としたのであって，親鸞から蓮如への断絶のないことを考察した。

以上のものは今まで日本宗教学会等で発表し論文にまとめたもので，現在継続的に研究を進めているものの概要である。

- 4) 日本におけるユニークな哲学の創設者とみなされる西田幾多郎博士と田辺元博士の宗教哲学の相違を中心として研究を進めている。それに関連する学会発表は次の通りである。

2. 学会発表

I 昭和51年度

- 1) 絶対無と他力について 日本宗教学会 第35回学術大会(10.10)，上智大学。

II 昭和52年度

- 1) 絶対無と宗教 日本宗教学会 第36回学術大会(10.15)，愛知学院大学。

3. 刊行論文・著書等

- 1) 絶対無と宗教(日本宗教学会発表の研究報告). 宗教研究 51(3): 38-39, 1976.

歴 史 学

助 教 授 小 沢 浩

1. 研究概要

日本の社会や文化の特質を「民衆」という視点からとらえかえそうとする要求は，日増しに高まりつつある。昨今の民俗学の隆盛はその表れの一つである。歴史学の分野においても，歴史の発展における民衆の役割を明らかにしようとする試みは戦前からあったが，生活様式や意識の面にまでふみこんだ研究の必要性が認識されるようになったのはつい最近のことである。ことに近代史の分野では，1950年代から，日本の近代化を最深部から担った民衆の思想や運動への関心が高まり，「民衆運動史」ないしは「民衆思想史」とよばれる独自のジャンルを切り開いてきた。しかし，方法的にも実証的にも，いまだ共有しうる成果はそれ程多くはない。このような現状のもとで，それぞれ異なった関心と方法をもつ他